

答えのない問いを抱えるひとつの器 —親グループの実際—

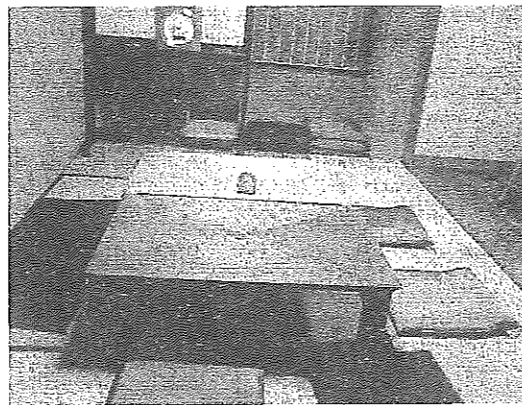
京都文教大学  
講師 高橋紀子

すきっぷでは10回のセッション終了後、フォローアップ面接というものがある。これはすきっぷの感想や今後のことについて保護者の方に確認する場で、子どもグループだけでなく親グループについても尋ねることになる。すると「良かった」「有意義だった」という、いわゆるポジティブフィードバックがさらりと交わされた後、あれこれと要望があがることもある。いや、大抵そういう流れになる。残念ながら…と言っているかわからないが、ここで指摘される事柄はもっともなことが多い。クライアントとはカウンセラーよりうんと遙かに、より良い術を知っているものだなあとつくづく思う。しかしそんな悠長なことを言える雰囲気ではあまりなく、熱心であれば熱心であるだけスタッフはひとしきり反省と抑うつを体験し、来シーズンの検討をする。

この一連の流れを見ていて「だったらいっそ、すべて終わってから言われるより、グループの最初か合間に要望を確認したほうがいいんじゃないか?」と思っていた。そこで親グループのファシリテーターを大学院生とすることになった際、最初の回を親グループへの要望を話す場とした。その材料に使おうと、その場でできる質問紙調査を実施したことがある。質問紙の設問は確か「親グループにどんなことを期待しますか」といった簡単な教示の後、情報の共有・子どもの理解…等の項目をあげ、「とても期待する」から「まったく期待しない」の5件法で尋ねる、というものだったように思う。思う、と曖昧にしか言えないのは、結果的にこの質問紙調査が失敗で全く役に立たなかったので「こんな調査をしても仕方がない」という記憶しか残っていないためである。というのも、この調査を行ったところほぼ全員がほぼ全ての項目に対して「とても期待する」に○をつけた。

天井効果はなはだしく、分析もニーズの焦点化もあったものではない。

当時一緒にファシリテーターをした大学院生の野崎さんの、この時の表情が忘れられない。「どうでしょう!」と困惑した表情で私を見た後、きりりと腹の座った顔をした(ような気がした)。大きな勘違いをしていたと、あの時私たちは悟ったように思う。親グループに対して要望がどんどん出るのは、すきっぷが要望に答えていないからではない。それ以前に、私たちが応えられる程度のことではないのだ。ここにいる方達は沢山の支援を必要とする状況にあり、その状況は長く抱えてきた切実なものである。親グループにできることがあるとしたら、必要ながら得られない支援が「ある」ことを分かち合うぐらいのことであろう。そのぐらいのことしか出来ないであろうし、そのぐらいのことでもきつと意義はある。あの時の「とても期待する」にしか○をつけられていない質問紙は、圧倒的な現実と限界を突きつける一打だった。



<親グループ室>

親グループでは、前回の子どもグループの様子を録画したビデオを鑑賞し、これまで学校の先生から聴くだけだった自分の子どもの様子を覗いていただき、子どもへの理解を深める…というのが表向きの趣旨であり流れである。しかし実際のところその話題は子どもの理解に留まらないことが多い。ビデオに触発された保護者の方々からは、「彼らが性の目覚めをどう体験するか」「トラブルが犯罪につながらないか」「理解者に今後出会えるか」「自分が老いた後そして死んだ後この子はどうやって生きていくのか」といった生のテーマ、死のテーマが語られることも多い。「どうしたらいいんでしょう?」という問いに十分な答えなどあるはずもなく、私たちはその問いを受け止めるしかできない。答えのない問いの中に共にいる。これは個別相談の臨床にも共通する体験かと思う。しかしグループが個別相談の臨床と違うのは、その答えのない問いの中にある他者に出会う体験である。息をひそめ、かける言葉もない間を繰り返すうち、参加者は次第にお互い支え合うようになる。相手の子どもの成長を伝え、「参考になれば」と自分の体験を話す。寒い日には相手の健康を気づかい、互いの情報を交換する。小学2年生の親と小学4年生の親、同じ小学校の親と違う小学校の親、教育熱心な親と自由にさせようとする親。その組み合わせは幾重にも変化し、答えのない問いを抱え支え合う「今」が生まれる。

余裕の出た参加者は時折(一見自分の子以上に)子どもグループのサポートスタッフ(それは大抵若い男性)を応援するようになることもある。「だいぶ余裕ができた」「こういう時はこうすればいいんじゃない?」。活字にするとハードな批判も、実際には朗らかに発せられる事が多い。笑顔の中に本音があるとも言えるだろうが、そんな時私たちがそれを批判と捉えては、どこか野暮な気がする。子どもグループは参加する親にとっていわば唯一確実に全員で共有できる話題であり、そこで発せられる言葉は、ちょっと語弊があるかもしれないが例えば阪神ファンが選手を叱咤激励するようなニュアンスもあるんじゃないかと思う。気ままに子どもグループの核心をつき笑いあう保護者の方々の様子をみていると、すきっぷは支援する場があるという事

実が支えになっている部分も大きく、もしかしたらそれが全てなのかもしれないとすら思う。より良い支援を検討することは無論大事であるものの、すきっぷを続けていく、つないでいくことが大切だとしみじみ感じる。

2009年度の秋学期は修士1年の2名と親グループを担当した。彼らが本当に立派だったのは、全てのセッションにおいて均一に準備をしていたことにあると思う。お茶をいれ場を整え必要な申し送り事項を伝える。すべきことひとつひとつをまるで茶道の所作のように丁寧に行っていた。私は彼ら2名をお茶のCMに重ねて「伊右衛門さん」と心の中で呼んだ。ファシリテーターの仕事は、メンバーの相互作用と触発により発生した力動(グループダイナミクス)を掴み、促進させたり竿を立てたりしながら理解や洞察を促進することにある。これは結構細かい観察とそれなりのエネルギーでもって行われるのだが、伊右衛門さん達はこれらを「偶然」や「自然に」生じたこととして静かに受け止め、淡々とすべきことをしていた。そんな彼らを見てると大きな水瓶を連想する。参加者がグループの水面に落とした石が溢れ出さずにグループの中で波紋となり寄せては返す波を生むには、グループが確かな器でなくてはならない。伊右衛門さん達は確実にその器を作っていた。

親グループが繰り返される中で、この器がより確かなものとして内在化されていくと良いと思う。そしてすきっぷに携わった大学院生が、やがて臨床家としてどこかでまた新たな器を作る人となれば、今よりももう少し、発達障害という生きづらさと生きる人達が、答えのない問いを抱えやすくなる世の中になると思う。



<親グループ室準備風景>